龍神の願ふ湧水　聞所食し
宇奈岐日女神　護る湯布院

令和三年二月十一日

大中臣正比呂

宇奈岐日女神

首にかけ、高貴な女性を飾る勾玉は、古くは「うなぐ」と称していた。その「うなぐ」の呼称を持つ巫女が、宇奈岐日女である。

神に仕える彼女は、神託を受け、湯布院の沢の水が流れ入って低地に広がる、大沼の灌漑を思い立つ。　そこで従者の道臣命に、沼を塞いでいる山々の一角を取り除くように命じた。道臣命は力持ちであったので、一気に山々を蹴破り、沼の水は大分川となって別府湾に流れた。後には湯布院盆地が残ったのである。この工事の功績であろうか、道臣命は蹴裂権現として祀られている。

さて、その沼には龍神が住んでいたのだが、水を抜かれて霊力は衰え、たまらず龍神は宇奈岐日女に、少しは沼を残してくれと頼むのだった。沼を残してくれれば、由布の山々の清き湧水を村人に提供しようと願い出たのである。

宇奈岐日女はこの願いを聞き入れ、今の金鱗湖を残してやった。龍神の約束通り、途切れぬ湧水は今も田畑を潤している。そして彼女は水神様として、湯布院の守護神と崇められ、宇奈岐日女神社に神として祀られている。

金鱗湖は湯布院観光の名所であり、高級温泉旅館とともに、その周辺には美味い蕎麦屋が何軒もある。恐らくはこの湧水で蕎麦を茹で、また水にぐらせているのであろう。

令和三年　建国記念の日に

大中臣正比呂